



9月12日開催の創立120周年記念イベント「健康フェス2015」。  
 (1段目)小川彰理事長基調講演、川田龍平参議院議員・本学客員教授特別講演、御寄付者顕彰セレモニー

# 主 陵 会 々 報

発行所  
 岩手医科大学主陵会  
 〒020-8505盛岡市内丸19の1  
 Tel 019(651)5111番  
 Fax 019(624)8380番  
 E-mail: info@keiryokai.gr.jp  
 URL http://www.keiryokai.gr.jp  
 題字 三田定則 先生書  
 発行人 石川 育成  
 編集人 前沢 千早  
 印刷所 山口北州印刷

10 月 号

## 目 次

石川育成主陵会会長ご挨拶	1
小川彰理事長・学長ご挨拶	3
創設二〇周年記念事業	6
教授就任のご挨拶	8
医療専門学校入試概要	9
薬学部学業奨励奨学金奨学生	12
学術振興会学術賞・共同研究	16
主陵会本部より	18
会則改訂、支部長・参与会	16
代議員会・総会	16
主陵会アンケート調査結果	31
支部だより	32
医学部同窓会だより	32
評議員会・総会	32
歯学部同窓会だより	32
薬学部同窓会局だより	32
FAXニュース	32
主陵会学生活動優秀賞	32
お祝い・ご逝去・編集後記	32



## 主陵会会長ご挨拶

主陵会会長 石川 育成

昨晩は、支部長・参与会が盛大に行われました。また、本日はせっかくの日曜日でございますが、ご参加をいただきましてまことにありがとうございます。

後刻小川理事長・学長先生よりお話もございまして、私からは、今までの流れの中でどうしてもここだけははっきり申し上げておかなければならないという部分を抽出しながらご挨拶にかえたいと存じます。

もう既にご案内の通りでございますが、岩手県立図書館から見つかりました文献から明治三十年に岩手医学講習所が開設されたという、このことから考えれば原点をもう一度はつきりしておいたほうが良いということで、大学の理事会において創立の年を明治三十年に決定したわけ

でございます。それにより、平成三十一年に矢中新病院が完成しますが、その二年前の平成二十九年に本学は創立百二十周年の節目を迎えます。そのような流れで計画が進められているところです。

でございます。

その中で、創立百二十周年記念事業の主たるもの一つとして、総合移転整備計画の最終章としての患者さんに優しい病院、日本一、東洋一あるいは世界一と高邁な理想を掲げた矢中新病院の建設があります。これにつきましては、先生方はいろいろとご心配をされていることと思えますが、まず本年度内に検討をしなければならぬのは建設費の高騰です。三〇%位高くなるのだからという予想ですが、これは東日本大震災というあの忌まわしい地震と津波によって、あちらこ

まわしい地震と津波によって、あちらこ



## ご挨拶

学校法人岩手医科大学 理事長・学長

小川 彰

主陵会の先生方には大変お忙しい中、また遠方より盛岡までお運びいただきまして、本当にありがとうございます。

また、代議員会では、各支部より大変積極的なご意見等々をいただいております、この場をお借りいたしまして厚く御礼を申し上げます。

日頃より先生方のご支援によりまして、大学運営が滞りなく進んでおり、そのご報告を申し上げたいと思います。

### ○本学の歴史について

本学は明治三十年に私立岩手病院医学講習所より始まっており、あと二年で百二十周年を迎えます。

明治四十五年に一度廃校の憂き目にも遭いましたが、その後昭和三年に岩手医学専門学校として再発足をして以来八十七年、戦後新制岩手医科大学に昇格して六十八年となります。

石川会長からもご案内があったと思います。数年前に岩手県立図書館から岩手病院、岩手医学校、岩手看護婦養成所、岩手産婆学校、その他の事業についての十年間の経営概況報告という事で、三田俊次郎先生と三浦直道先生

が明治四十年に記された報告書の冊子が出てまいりました。

この中には明治三十年に何名の医学生、看護学生、産婆学校生が学んでいたかということも事細かに載っております。また、その他にその当時の写真や数年前に入手いたしました動画もあります。

その明治三十年に全国にどのような医学校があったかと申しますと、医師養成機関としては十三施設、その内官立が九つで、東京帝国大学と旧制の第一高等学校から第五高等学校までと、三つの公立医学校。私立は全国で四施設で、その内二つは東京にあり、一つは野口英世が学んだ済生学舎。これは順天堂医院を教場として使っておりますがのちに廃校となりました。

もう一つは慈恵医院医学校の前身である成医会講習所です。地方では、本学の前身、私立岩手医学校と私立熊本医学校の二つのみで、熊本医学校はその後県立を経て国立熊本大学になりました。したがって、現在医学部・医科大学は全国に八十校ありますが、その内私立医大二十九校の中で、明治三十年から歴史をつないでいるのは東京慈恵医科大学と本学だけであり、地方

では本学だけ、というすばらしい歴史を本学は持っているということです。

その歴史から、本学は二年後の平成二十九年に創立百二十周年を迎えることとなります。

その記念事業の一つとして本学に看護学部を設置し、四学部体制とすることの準備が現在進んでおります。

戦後の歴史では、歯学部が昭和四十年に東北・北海道で初めての歯学部として発足をしました。以来歯学部は五十年の歴史があります。

歯学部は発足後初期の二・三十年は、歯科医師国家試験合格率ナンバーワンということで公私立が羨むすばらしい時代がありました。しかし、現在はいろいろな国の政策等々で苦しい状況にあります。

また、平成十九年には薬学部を発足させ、現在三期生までの卒業生を輩出しております。

このように現在本学は、医学部・歯学部・薬学部、そして、それぞれの大学院を持つ医療系総合大学として各学部の連携の下に教育・研究・診療が行われております。その中でも、日本で医療系の複数の学部を持つ大学は少なからずありますが、異なる学部の学生が同じ一つのキャンパスで学んでいるというのは本学だけで、全国で初の試みです。

そして、講座につきましては、今までは学部毎に各講座が所属していましたが、現在本学は学部を越えて、医学部・歯学部の基礎講座を一本化して統合基礎講座として開設しております。これは、日本では初めての試みです。これについては、当初は前例がないということで文科省の反対がありました。三年越しで許可が下りました。その際、文科省より大変すばらし

い取り組みであり、他大学の模範になるような運営をして欲しいということを言われておりません。

また、歯学部ではハーバード大学と連携をし、現在改革プロジェクトが進んでおります。これは主陵会会長である石川先生のお嬢さんの永井成美先生がハーバード大学の歯学部で唯一日本人正教員として教鞭をとっておられ、その繋がりではハーバード大学との間で対等連携ができ、改革プロジェクトが進められているものです。歯学部の教育システム・組織等の問題を改善し、教員・学生のモチベーションの向上を図っております。

#### ○矢巾地区の状況について

現在私たちがおりますこの本部棟、また講義実習・研究棟があるこのA敷地に、東日本大災害後の平成二十五年三月に文科省から多大なご支援を受け、災害時地域医療支援教育センターが完成しました。この建物は、免震重要棟とも言うべき施設であり、全県の医療情報をストレージするサーバーをここに設置する予定で、独自の非常用電源をも設置した建物となっております。災害時には県内災害医療の中核拠点として機能する施設であります。また、中には、災害医学講座、災害精神医学講座、こころのケアセンターが入っております。

現在岩手県では被災地でこころのケアが大変大きな問題となっておりますが、このこころのケアセンターは、そのケアのための中央センターであり、本学のセンターを中核として被災地に四カ所サテライトを置いて活動を行っております。

また、災害時地域医療支援教育センターでは、日本災害医療ロジスティクス研修や様々な研修が行われております。研修会開催に際しては恐らく関東直下型あるいは東南海地震が予想されるということで、全国より毎回募集定員の三倍位の応募があることから、毎月開催をしておりますが受講希望に追いつかないという状況です。

#### ○矢巾新病院の核となる「エネルギーセンター」

現在新病院建設予定地のC敷地ではエネルギーセンターの工事が新病院の事業に先行して進められております。

通常、病院の機能は電力が5%から10%制限されただけでも停止してしまいます。新病院に關しては、六千キロワット程度の発電機能が必要であり、災害時には非常電源では到底病院機能は維持できません。そのため、ライフレインが停止状態でも一週間程度全ての病院機能を維持できるエネルギーセンターを新病院に隣接してつくっております。

これは世界で初めてであり、広域災害時には矢巾新病院は首都圏のバックアップ病院としての機能を持つこととなります。

#### ○矢巾新病院について

新病院は、広いキャンパスを持つていることから、私は当初は低層で広く伸び伸びとした病院が良いのではと考えました。しかし、国内外の主立った大病院を見させていただいてその考えが変わりました。超高齢化社会で患者さんに長く歩くことを強要することはできません。その結果、なるべくコンパクトにすることをし、

外来は短い動線で効率良い各検査室の配置としました。

このように、新病院は災害に対して対応するのみではなく、患者さんにもやさしく対応するコンセプトとしております。

また、病院の各フロアには医局を配置することとしました。これは、国立大学病院などでは一般的には臨床研究棟を病室とは別につくり、医局をその研究棟に配置しておりますが、その考え方は研究中心の考え方であり、患者中心の医療を考えれば、医師の居住区は病室に隣接すべきであるということから、医局も病室のある各フロアに配置をするという患者さん中心のコンセプトで進めております。

#### ○矢巾新病院を取り巻く環境の整備について

新病院の建設により、新病院をとりまく環境についても次のような整備等が行われる予定です。

- ①東北高速自動車道の矢巾パーキングにスマートインターをつくることになっており、一部建設が進んでいます。
- ②新病院前の車道は、開院までには歩道付の片側二車線の高規格道路となります。そして、将来的にはその道路は、現在盛岡駅に直結し盛岡南インターに接続している西バイパスまで延長され、南は国道四号線に繋がることが検討されています。
- ③市民に開かれた病院ということで、矢幅駅から新病院まで連続する街並みを形成するため、病院本棟と県道の間にフードセンターとショッピングモールを配置し、あわせてホスピタリティンとして都市型ホテルを誘致するなど、患者さ

んやご家族のニーズに配慮するとともに、病院らしさを感じさせない環境づくりを検討していきます。

### ○内丸メデイカルセンターについて

矢巾新病院と内丸メデイカルセンターについては、二つの病院とは考えておりません。矢巾新病院は高機能の治療病院として、内丸メデイカルセンターは高機能の外来病院として整備をし、二つの病院を一つの病院として連動させます。

内丸メデイカルセンターの入院施設は現在の循環器センターに五十床から百床規模の病室を置きます。(循環器センターとしては使いません。)そして、現在の歯学部・歯科医療センターの一部と日赤岩手県支部より取得した歯学部隣接の用地を中心に外来部門を整備し、それとPET・リニアックセンターを結ぶ構造とします。これにより将来的に現在の本学の建物で内丸地区に残るのは、一号館、循環器センターがある六十周年記念館、PET・リニアックセンター、看護師寮の木の花会館で、そのほかは全て取り壊しとすることで検討を行っています。

この内丸メデイカルセンターは、当初は矢巾新病院の開院一年前の平成三十年に開院する計画でありましたが、計画を進める中で、同センターの工事に伴う歯学部の一時的移転の煩雑さ、加えて建築費が高騰していることから、平成三十一年度からとなる第二期盛岡市中心市街地活性化計画に内丸メデイカルセンターを盛り込み、国からの財政支援を受けた内丸メデイカルセンターの整備事業として検討を加えることとなりました。したがって、平成三十一年の矢巾

新病院移転後は、内丸メデイカルセンターの機能は、診療部門は現在の医科外来を、入院部門は現在の循環器センターを使用する等、一時的に内丸の既存の施設を活用する計画で進めております。

### ○「日本の医学・医療の再生への道」

話をかえませんが、私ごとで申しわけありません。実は「沈みゆく大国アメリカ」という堤未果氏の著書(集英社新書発行)がベストセラーになっていきます。その「沈みゆく大国アメリカ」には、アメリカに追従する日本の医療の問題点が書かれておりますが、その中に、私も知らなかったのですが、『岩手医大の小川学長は二〇一〇年当時、「日本は医薬品にせよ医療機器にせよ、現在は圧倒的に輸入超過である。医薬費を見ると輸入が約二兆円に迫る勢いである。反面、輸出は十分の一にも満たない。」等々問題視をしていること、また「日本はこのような不平等政策によつて海外の薬品や医療機器を三倍も高い値段で買わされている。技術立国であるにもかかわらず、日本はずっと経済的に抑えられてきた」ということを書いています。」と私がどこかに書いたものを引用していただいております。

また、『前述した小川学長は「日本は外国製の医薬品、医療機器をはるかに高額な値段で買わざるを得ない環境をつくられている。」とし、MOS協議(日米構造協議)以降、なかなか日本の技術力が向上していないということに関して「日本の研究者・医師・企業が自由闊達に能力を最大限活用できる環境を本邦に整備することが、日本の高度医学・医療を背景にして、医薬品・医療機器開発の分野で飛躍的な伸びを

示すこととなり、国益にかなうこととなる。」と書いている。」というようにも引用していただいておりますので、ご興味がございますたなら、お読みいただければと思っております。

### ○最後に

岩手医科大学は、今現在ほとんど発展をしておりまして、日本はもとより世界でも注目されております。百二十周年記念事業としての病院移転については、日本のみならず、東洋のみならず、世界トップレベルの病院をつくらうというところで、今一致一丸頑張っておりますので、主陵会の先生方にはいろんな意味で物心両面のご支援を平に平にお願い申し上げます。私からのお話とさせていただきます。

小川 彰理事長・学長先生のお許しをいただき、平成二十七年主陵会総会におけるスライドを用いてのご挨拶をそのまま掲載させていただきました。



誠のあゆみ、  
未来へつなぐ

■ 創立120周年記念ロゴマーク・スローガン ■



# 教授就任のご挨拶

平成二十七年七月一日付



薬学部地域医療薬学科

## 教授 高橋 寛

主陵会の諸先生方におかれましては、ますますご健勝のことと心よりお喜び申し上げます。

さて、この度私は平成二十七年七月一日付けをもちまして、薬学部地域医療薬学科の教授を拝命いたしました。歴史ある岩手医科大学で教育・研究に携われることを大変光栄に思っております。

私は、昭和五十八年に東京薬科大学を卒業し、一年間大学で研究を続け、その後東京都新宿にある東京医科大学病院薬剤部に八年間薬剤師として在籍しました。当時の薬剤部はまだ調剤が主な業務でしたが、病院の薬剤師が病棟での臨床業務に取り組み始めた時期でもあり、病院薬剤師としての後半は病棟常駐の薬剤師として病棟業務を行ってまいりました。担当した病棟が血液疾患や代謝内分泌疾患の患者さんが多く入院していたため、業務と並行して白血病患者のシタラマン(Ara-C)の体内動態についての研究や、抗真菌剤の唾液への移行についての研究などを行ってまいりました。

その後は故郷秋田市へ戻り、医薬品御勤務、そしてこの六月まで保険薬局

にて長年薬剤師をしてまいりました。

秋田県薬剤師会においては学術委員長や実務実習の委員長などを長く経験させていただき、最後は秋田県薬剤師会専務理事として薬剤師の育成と学術的な活動に精力的に取り組んでまいりました。

一方教育活動としては、平成十八年から日本薬学会の薬学教育改革大学人会議に参画し、実務実習モデル・コアカリキュラム「評価」の作成をはじめ、さまざまなワークショップのタスクフォースとして教育改革のお手伝いをさせていただきました。

また日本薬剤師会では、平成二十一年に実務実習指導の手引きをはじめ、DVD「薬学教育実務実習指導のポイント」の作成に携わりました。

平成二十三年三月の東日本大震災では、秋田県薬剤師会の派遣薬剤師として震災間もない時期に約十日間宮城県石巻市に支援に赴きました。避難所となっていた石巻高校に拠点置き、教室を利用して立ち上げられたばかりの高校内の仮設診療所での調剤支援とともに、石巻市内の避難所への一般用医薬品の供給や避難所での衛生指導などを行ってまいりました。まさに薬剤師法第

一条の実践であり、この時に薬剤師としての基本を再度考えるきっかけとなったようにも思います。

平成二十五年には、薬学教育および実務実習モデル・コアカリキュラムの改訂作業にも関わり、学習成果基盤型の考えに基づいた教育目標の作成に参画させていただきました。

このように約十年間、薬剤師としての日常業務を行いながら薬剤師教育に関与させていただいたのが縁で、今回この岩手医科大学にて学生を教えるという機会を頂戴いたしました。薬学部長の前田先生をはじめ関係者の皆様には、心より御礼を申し上げます。

昨今薬剤師業務は大きく様変わりし、病院薬剤師は臨床業務として病棟での活動が主体となり、薬局薬剤師は処方箋調剤に止まらず、セルフメディケーションの推進と一般用医薬品の供給、そして在宅業務への取り組みが二〇二五年問題として急務になっております。そのような意味でも、社会からは益々六年制薬剤師への期待が高まっております。しかしながら、六年間の薬学教育で学ぶべき内容も膨大になりつつあり、知識を覚えるだけではな

く、学び方を覚え、その知識を応用できる力を修得することが課題となっております。薬物治療に責任をもてる医療人としての薬剤師の育成を御旗とし、楽しく学ぶことができる環境を学生に提供し、学生も教員も共に成長する大

学教育に寄与したいと存じます。私は以前、秋田県での交流事業として米国ミネソタ州のメイヨークリニックに数回行く機会を得ました。ご存知

の通りメイヨークリニックは全米で一番人気がある病院で、複数の病院を運営しています。内丸にある岩手医科大学の建物は、そのメイヨークリニックのシーベンスビルやプランマービルと重なる雰囲気がありとても懐かしく、内丸に行くのを楽しんでます。メイヨークリニックはマグネットホスピタルとも言われ、患者さんも、そして名

医も全世界から集まって来るとても魅力的な病院です。さらに、メイヨークリニックがあるロチェスターという小さい町は、労働人口の約6割が何らかの形でメイヨークリニックと関係があり、まさに町ぐるみでメイヨークリニックを支援してまいりました。

岩手県も超高齢社会にあり、今後地域包括ケアシステムという新たなしくみを地域毎に構築していく必要があります。五年後にはここ矢巾に新病院が移転する予定のようですが、この矢巾キャンパスを中心に新たな町づくりに協力できればと思います。メイヨークリニックで学んだことを活かしたいか、今後探求していきたいと考えております。

現場の実務を行いながらも地域住民の健康管理に関わり、臨床に役立つ研究を続けられる若手薬剤師の育成に邁進したいと存じます。まだまだ微力ではありますが、諸先生方のお力をお借りしながら実践していく所存でございます。

主陵会の先生方にはご指導とご高配を賜りますようお願い申し上げます。

## 教授就任のご挨拶

平成二十七年八月一日付



医学部外科学講座

## 教授 佐々木 章

主陵会の皆様方におかれましてはまずご清祥のこととお慶び申し上げます。この度、二〇一五年八月一付けをもちまして、岩手医科大学医学部外科学講座教授を拝命いたしました。伝統ある講座を主宰させていただくことは、身に余る光栄でありますとともに、その重責に身の引き締まる思いでございます。

私は、岩手県花巻市生まれ、一九八八年に金沢医科大学医学部を卒業後、同年五月に岩手医科大学外科学第一講座に入局いたしました。斎藤和好教授のご指導の下、食道良性グループ(渡辺正敏講師)に所属し、当時高侵襲手術であった開胸下食道静脈瘤手術、食道アカラシア手術などの診療で初期教育を受けました。また、食道癌グループへの配属も多く、周術期管理のために当直する毎日でした。食道疾患の臨床を行いながら、石田 薫講師、故佐藤信博助手のご指導を受け、胸部食道癌に対する後縦隔経頸頭部吻合術後の嚥下機能と誤嚥発生機序」というテーマで一九九四年に学位を授与していただきました。一九九〇年代に入り、食道静脈瘤治療の変遷により硬化療法・結紮療法などの内科治療が増加し、食道良性グ

ループの手術件数は激減していきました。また、一九九二年に腹腔鏡下胆嚢摘出術が保険診療に収載されて以来、内視鏡外科手術は急速に普及するようになりました。私は、一九九五年に内視鏡外科グループ長に任命され、約二〇年間にわたり内視鏡外科手術の安全な導入と普及に努めてまいりました。そして、二〇〇五年に赴任された若林 剛教授からご指導を受けながら、教育・研究・診療に携わってまいりました。

外科学講座の診療領域は広く、内視鏡外科・肝胆膵、食道、胃、下部消化管、乳腺、小児外科、高度救命救急センター、リサーチグループから編成されていますが、二〇一四年の総手術件数は一二〇七例であり、私が入局した時よりも約二・二倍に増加しています。安全で合併症が少なく手術を提供できるように、手術指導、症例・合併症検討会での教育に今後も取り組みたいと考えています。二〇一四年の内視鏡外科手術の比率は、胆嚢良性・内分泌代謝疾患一〇〇%、大腸癌九〇%、食道癌七四%、胃癌六六%、肝癌五〇%ですが、今後も内視鏡外科手術の発展に貢献できればと思います。このような低侵

襲治療を行う一方で、消化器癌の集学的治療も積極的に行ってまいりたいと思います。二〇〇七年に生体肝移植が成功して以来、二〇一五年八月までの肝移植数は六六例となり、生存率も全国平均以上であります。この状況から、高侵襲な肝移植と低侵襲な内視鏡外科手術の両手術法を共存させるべく努力したいと考えています。矢中新病院の移転に向けて、低侵襲手術は患者数を増やして収益を期待できる手術とし、高侵襲手術での潜在的な損失を補填する方向性は合理的と思われまます。また、各領域で安全な手術の導入と手技の定型化ができた現在、今後はクリニカルパスの在院日数を見直して、効率的に病床利用率を高め、病院収益の確保を図ることも重要と思います。このためには、教員とメデイカルスタッフの意識変容に向けた取り組みも重要と思います。研究では、低侵襲手術の開発(乳房アプローチによる内視鏡下甲状腺切除術)、新治療法の評価(肥満外科手術)などを海外に発信してまいりました。今後は、日常診療の問題に即した臨床研究の実践、先進・独創的治療の開発と評価、そして、癌に関する研究では、基礎医学講座の先平方と密接に連携をとりながら進めたいと思います。私が現在進めている肥満外科手術の研究では、二型糖尿病、睡眠時無呼吸症候群、非アルコール性脂肪性肝炎に対する効果や機序を検討中です。高度肥満症では多くの肥満関連健康障害を合併していることから、今後は色々な研究の方向性があると思いますので、関連する三学部講座(分野)のご支援とご協力をいただきながら、進めてまいりたいと考えています。

教育では、学生が学問や外科学の可能性に興味を持っていただけるような環境作りをすることが私の責務と考えています。診療能力の向上は研究推進と表裏一体と思いますが、この基盤として教育が最も重要と考えています。そして、人を育てることが、私を含めたチーム医療体制の確立と大学の発展に繋がると信じています。私のご指導を受けた斎藤教授は開放的な教育環境を重視、若林教授は齋藤外科で育った教員とともに診療実績を向上させ、教室を飛躍させてまいりました。私は、各診療領域における次世代の指導者の育成が急務と考えています。そして、「外科学の進歩、医療を取り巻く環境と社会情勢の変化に迅速に対応できるような外科医の育成」のために、教員意向に沿ったテーラーメイド教育を重視し、独創的な高い研究能力と教室のエビデンスを世界と将来に発信できる国際性豊かな後進の育成を目指したいと思っております。

もとより微力ではございますが、諸先輩方が築いてこられました伝統ある教室および大学のさらなる発展のために教育・研究・診療ならびに後進の育成に誠心誠意努力する所存でございます。今後とも、主陵会の皆様のご支援を賜りながら、教室が新たな一歩を皆で踏み出せるよう、そして教員一同が結束し、教室のさらなる発展を目指してまいりたいと考えています。より一層のご指導・鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。挨拶とさせていただきます。